

## ウサギにまつわるエピソード

ウサギ年が明けました。「卯」は十二支で4番目。方向でいうと東、時刻でいうと午前6時ころにあたると思います。十二支の動物の中では、体も小さくやさしいイメージなので、子供向けのいろんな物語にもなっています。

誰でも知っている童話では：兎と亀、うか。それに青森県の民話とも言われる誘ってくださいね。



カチカチ山、因幡の白兎などでしょう。「お月さまに行った兎」などは夢を

子供のころ、満月には「兎が餅つきをしている」と言われ、よく空を見上げたものでした。でも、やがて高校時代の地学の時間にその淡い物語は崩れていきました。「地球から黒く見えるところは、実は月の表面のクレーター（円形の盆地や山脈）」だったのです。



更に、アメリカのアポロ計画で、40年前に歴史上、人類がはじめて月面に着陸すると、月の実体が科学的にはもっと身近になりました。でも、時代は移っても、科学は進歩しても、月の中の兎は子供たちの夢の中に輝き続けて欲しいものです。

ところで、兎は多くの諺や譬喩言葉にもなっています。

「二兎を追うもの一兎をも得ず “If you run after two hares, you will catch neither.”」 「始めは処女の如く、終わりは脱兎の如し」——解説の必要もないと思いますが、前者はあちこちに手を広げず一つのことに集中することの大切さを訴え、後者は急激に変化する人間の姿勢や逃げ足の速さを表しています。

「株を守りて兎を待つ」——古い習慣にこだわり、それにとらわれて進歩のないこと、融通のきかないたとえですね。兎が木の切り株にぶつかって死んだのを見た男が、それから働かずに株を見張ってまた兎を得ようとした故事です。北原白秋の「待ちぼうけ」の歌にもなっていますね。

©, Nishikado, David



大人の世界では赤色のタイトで少し色っぽいチョッキのいでたちで、耳を長く伸ばしたキュートなバニーガールのお姉さんたちでしょうか。

さて、本稿を締めくくるにあたって訴えたいこと。それは兎の跳躍力。私も今年古希。無理をせず、遅くとも亀のような着実な歩みを心がけながらも、人生の凹凸道を、いつもの「ハゲアタマ」（ハツラツと、ゲンキに、アカルク、タノシク、そしてマールク）をモットーに元気に飛び越えていきたい、と願っているところです。

